

<報告>

長鼻類団研による大英博物館(自然史)の巡検報告

小 沢 幸 重*

長鼻類団研は、1983年の7～8月に英国への巡検を行なった。大英博物館に所蔵されている長鼻類を研究するためである。この巡検をとうして得られた、たんに日本で見ることでできない先祖型の長鼻類の研究成果だけでなく、成書にはない海外の研究サービス状況の一端や、反省点などを経過を追いつつ報告する。

1 経過

海外(とくにヨーロッパ)では、我々にとっても入手できそうもない貴重な化石を切断して得られた研究成果が、よく見うけられる。しかし、日本の古生物学の状況をふりかえるなら、貴重な標本を切断するのは何らかの罪悪感を伴もなりし、犯罪視される。これは「近代化の先端をゆく」と自負する化石研究会(以下、化石研と略す)とて例外ではない、と感じている。ところが1982年6月に立寄った大英博物館とパリ第6大学では、いとも簡単に *Moeritherium* や *Palaeomastodon* の歯を切断し研究用試料として渡されたのである。この時は天にも昇る気持であったが、同時に、何故か、タイプ *Desmostylus* の臼歯を切断して研究した井尻正二会員のことが頭に浮んだ。井尻会員の研究方法に対して疑問を持っている化石研の若手会員が身近かにいたためでもあろう。ともあれ、大英博物館には予想をはるかに越える長鼻類化石が存在すること、研究目的のために容易に滞在が許されることも判ったのである。

長鼻類団研の目的は「ミクロからマクロまでの総合的な研究によって長鼻類の進化の全貌を明らかにすること」である。しかし *Stegodon* にしろ *Mastodon* にしても研究対称の標本が日本に少くないのが悩みの種といえる。そこで有志と計らい、経験のある先輩の忠告をうけながら巡検の計画を立てたのである。参加資格は、団研として初の訪問であるため、第一線で研究を行ないすでに論文を書いていること、巡検での目的をはっきりとさせ帰国後何らかの形で成果の発表を行なうこと等に決った。その結果、6名の参加希望があり、

目的などのレジメをお互に交換すると共に、公聴会的な会合で先輩の批判をあおいだのである。このため何人かの希望者には、辞退願うこととなった。

参加者の決定後は分担して先方との連絡、宿舎、旅行社との交渉を進めた。訪問先が、大英博物館以外にライデン地質鉱物博物館、ベルギー王立自然史研究所^{**}、パリ自然史博物館と増えた。ライデンは *Stegodon*、パリは *Moeritherium* が目的である。

博物館との連絡は、訪問が決ったら早いに越したことはない、夏のバカンスとはいえ閉じているところはなかった。大英博物館の場合、連絡が4ヶ月前(実際は来年訪ねることを口約束していたが)と迫っていたため、6名の受入能力がなく3名ずつ2グループに分けた。大英博物館には、長期滞在の人も含めて世界各国から研究者が常に訪ねているようであった。しかも誰れにも容易に滞在を許可するサービス体制はうらやましい限りである。

宿舎は、大英博物館のすぐ隣りの Imperial College の summer accomodation center に千地万造会員の紹介で予約した。1泊約4千円朝食付、簡素だが個室の寄宿舎である。昼と夜も安価なメニューがある。但し、美食になれた中年以上の日本人向の食事ではないようである。このため費用は実に安く、一人当たり40～35日で約40万円^{***}(交通費を含む、おみやげ代は別)であった。予算が不足している人のために、奨学金の申し出もうけたが今回は頼らずに済んだ。

2 博物館

先方へは、観察予定の標本リストを知らせていたためすでに調べられていて仕事にさしつかえなかった。大英博物館では、タイプ標本が展示されているため心配したが、研究室に運べるものは研究室で、運べないものはそのまま容易に計測させてくれた。巨大なアンチクウスゾウの骨格には、梯子をかけて計測した。ミクロの試料は、こちらで指定したものはほとんど切り取ってくれた。それにもまして、切断された臼歯や頭

* Yukishige Kozawa : Our excursion to British Museum (Natural history). 日本大学松戸歯学部。

** 自然史博物館であるが研究主体のためこのような名前になっているのであろう、本文中は、ブラッセル博物館とした。

*** 初めての訪問のため準備費用がかかった人はもっと高額になっている。しかし、我々は移動があり、多少高いホテル等に宿泊し、その他の費用を含めても40～80万円の範囲であった。

蓋が多いのには驚き、この観察だけでも時間が不足した。標本庫を囲むように研究室が並び、標本庫がエアコンで調節されそのため研究室も寒いぐらいであった。標本と研究第1なのであろう。しかし、以上のような事情は、大英博物館特有のものであるらしい、約400名の研究者（自然史のみ）をかかえる大博物館、イギリスの「顔」なのである。^{*}この博物館でひとりの観察・計測が終わった後、周囲に *Stegodon* や *Stegolophodon* の未記載かと考えられる化石が次々と見つかったが、今回の調査はかねてからの予定までで打ち切った。戦後の新しい標本も加えられているようである。

ちなみに、我々一行ほどじっくりと長鼻類化石を観察した者はなく、ある研究者は一週間足らずの調査で本を書いているとのことである。標本は全体的にクリーニングが行き届き、自分の希望する標本はすぐ手にとることができた。

ライデンの博物館は、展示は少なく、長鼻類では *Stegodon* が多く所蔵されている。しかしクリーニングも悪く、頭や歯の切断などもってのほかのようであった。ここでは *Cryptomastodon* を観察し、*Desmostylid* でなく *Stegodon* の臼歯の一部であることが、組織構造のうえから明らかであった（未発表）。しかし、ライデンの町並は美しい。

ブラッセルの博物館の展示は、百年余も変わっていないらしいとのことだったが、新館への移りの最中で全面的な改装を行なっている。その名の通り研究所付属博物館である。標本庫には第四紀の *Mammuthus* が山のようにあった。

パリの自然史博物館も、研究主導型であり、展示場にキュビエ以来の標本が所狭しとおかれている。しかし、長鼻類だけかも知れないが、我々のほうで標本を捜し出す始末であった。ミクロの研究とも無縁のようである。

とにかく、大英博物館の滞在が長がかったせいもあり、我々のサービスに努めてくれた Currunt さんと仲良くなって、種々の博物館利用法が判ったことも大きな成果である。巨大な標本を除き、極東の地日本へも、標本の貸し出しが可能であるとのこと大いに利用すべきであろう。ミクロの試料も要請次第で送ってくれるとのことである。

3 まとめ

今回の巡検は、各参加者の成果発表がまだ残っているが、一応評価できるものであろう。極東の地に於ける我々にとって、十数時間も乗る機上の旅は確かに楽ではない、しかしその日（24時間以内）に到着できるし、夏休み、冬休みを利用すれば研究成果を出すことが可能である。これを成巧させる鍵は、直接サービスしてくれる人との人間関係がひとつのポイントとなる。問い合わせの返信で先方の様子もほほつかみ得るであろう。

仕事の目的をはっきりとさせ、その成果をどのような形で発表するのか、先輩や周囲の人々に十分批判を仰ぐこと。単純なようだが、生れながらにして島国に育ち、欧州礼讃をしがちな我々にとって、^{**}必要なことであろう。何はともあれ、長鼻類研にとって、今後は強力に精力的に自分の力で研究を進めれば良いし、そのような条件ができた次第である。

欧州巡検に際し、御批判いただいた化石研究会会員である井尻正二、大森昌衛、千地万造、秋山雅彦、真野勝友の諸氏に感謝する次第である。

* 研究者の勤務時間は、フリータイム制であるが、我々の仕事ぶりを「クレージー」と言っているように、その仕事ぶりには、かつてのオーウェンなどの伝統は消えているようであった。

** 今回の巡検でもそうだが、日本を訪ねた欧米の学者に歯の鑑定を依頼したり、わざわざ欧州まで歯を持って行って鑑定を願ったりする態度が果して、我々の国際交流にとって正しいか否か、反省が必要であろう。